ひきこもリ्यूへー ~めぐりあい宇宙~

USAVICH

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひきこもりリューヘー　くめぐりあい宇宙

【Nコード】

N18250

【作者名】

USAVICH

【あらすじ】

NASAはスペースシャトル打ち上げ実験に当初クドリヤフカという犬

を使用する…はずだった。しかし、世間から批判を受け、やむなく別の実験体を探すこととなる。その実験体とは？

リューヘーシリーズ第一段！

プロローグ（前書き）

お初にお目にかかります。（m。ー。）m

作者は完全素人なので至らない点が御座いますが

どうかあたたかくみまもってやってください。

いちを連載小説なので可能な限り書いていきたいです。

プロローグ

昔々、遠い未来の事。

スペースシャトルで史上初、100億光年という途方もない距離の星に生物を乗せて到達させるという実験が行われることになった。

そしてその実験台にクドリヤフカという一匹の犬を使う……はずだった。

しかし動物保護団体から圧倒的非難を浴び、実験台を変更せざるおえなかった。

NASAはあらゆる統計を取り、宇宙に飛ばしてしまったら一生涯球には帰ってこれない永遠の旅になるという事を前提に、実験に使用しても非難されず、実験台としても有効的な生物を探した。

その結果全ての条件に一致する生物が一件だけ見つかった。

それは人間の「引きこもり」という存在だった。

引きこもりとは何らかの原因で自室に閉じこもり外界との交流を断絶した人間の事で、いわゆる社会不適合者である。

NASAは厳正な調査を行い、その結果ステージV（末期）の引き

こもりである

日本在住の無職リユール（20）を実験体を使用することを決定したのだった。

プロローグ（後書き）

いぬかわいいもんね、しょうがないね。

いぬ > ひきこもり(前書き)

実験体にえらばれてしまったリユーへの運命や如何に…

いぬ > ひきこもり

リユーヘーの部屋は昼だというのに関わらず宇宙の様に暗闇に包まれていた。

そしてその宇宙に漂う恒星の様に一台のテレビが光を放っていた。

その向かい側でリユーヘーは布団にもぐりこんだ形で眠っていた。

テレビでは政治評論家の対談が放送されていた。

「いやーしかし今回のスペースシャトルの件ですがね、生体実験に犬を使わなかった事

はとても素晴らしい判断だったと思いますよ、だってそうでしょう？いくら実験とはいえ

犬を殺す形になってしまふのはかわいそうだ。」

その力説に他の出演者達も大きくうなずいている。

「引きこもりが選ばれて正解ですよ。これで少しは社会の役に立てるという事を思えば

彼も本望でしょう。まあ彼の場合宇宙に行ってもブラックホールにでも引きこもるんじゃないですか？ははは

「

「言えますね。と、ここでお時間がやっしまいました。皆さんまた来週お会いしましょう。」

司会者がそう締めくくり番組が終了した。

いぬ > ひきこもり(後書き)

リユース>>ひきこもりと言われようだなw

聖域侵略（前書き）

実験体の捕獲のためついにNASAが動き出す！

聖域侵略

リユーヘーが目を覚ました時には3分クッキングの番組が放送されていた。献立は稲荷ずしだった。

テレビの右上のデジタル時刻表記は14時15分と表示されていた。引きこもりのリユーヘーは自室から出ることはないので食事などは親が定時に部屋の前に置いておくというスタイルだった。

リユーヘーは食事が用意される時刻をすでに回っていることを確認し、部屋のドアを開けた。

しかしそこには食事ではなく宇宙服を着た男が立っていた。

リユーヘーは無言でドアを閉めた。

「……………」

リユーヘーは目尻を擦り、もう一度ドアを開けた。

宇宙服を着た男が3人に増えていた。

リユーヘーは無言でドアを閉め鍵をかけた。

「なになに、なんなの！？今日のご飯宇宙服なの！？たべれません！」

リユーヘーは半泣きで部屋に仁王立ちしている1/1の俺の嫁フィギュアの後ろに隠れた。

ふとテレビを見ると自分の家が映っていた。

アナウンサーが家の玄関の前で中継している。

「えー、先ほどNASAが実験体の住居に入りました。」

リユーヘーは普段密閉している窓の隙間から外の様子をうかがった。

そしてそこには大勢の報道陣と見物客で溢れ返っていた。それを見て悟った。

「はは、なんだ夢か。びっくりした」

リユーヘーは安心してのそのそと布団のなかにもぐりこんだ。

その数秒後すさまじい爆破音と共にドアが吹き飛んだ。

リユーヘーは飛び起きた。爆破の影響でドアと共に吹き飛んだ1/1フィギュアの首がリユーヘーの足元にコロコロと転がってきた。

そして宇宙服達が入り込んできた。奴等の一人がその首を拾い上げて言った。

「私達はあなたを迎えにきました。御同行願います。」

「はひい、た、たすけて」

リユーヘーはチワワの様にプルプル震えていた。

「何も心配はいりません、あなたを旅行にご招待するだけですよ。
永遠にね……」

首だけになっても「俺の嫁」は相変わらずにこやかにほほ笑んでいた……。

聖域侵略（後書き）

NASAの方々、宇宙服でくる必要あったの？
意外とお茶目さんなんだな。

いぎ、NASAへ！！（前書き）

とつとつ自室から引きずりだされたりユーへー。

いざ、NASAへ！！

「速報をお伝えいたします。たった今リューヘーがNASAによって捕獲されました。

中継のイトーさん？」

「はい、こちらリューヘーの自宅前から中継です。あっ、ただいまリューヘーが玄関からできました！！？ なにか抱えています！あれは…あれは首です！人形の首です！リューヘーさん！一言お願いします！リューヘーさん！」

けたたましいフラッシュを浴びつつも宇宙服に囲まれたリューヘーは無言でNASAの車両へと消えて行った。

「皆様、かつてあれほどまでに引きこもり然とした人間を見たことがありましようか！！

あれは紛れもなく引きこもりです！！彼を表現する単語にこれ以上相応しい言葉はないでしょう！！

以上、中継のイトーが現場からお伝えしました。」

リューヘーを乗せた白いバンは人混みをかき分け発進した。

リューヘーはあまりの急展開に放心状態にあった。

隣に座っている宇宙服を見ると見るからに暑そうだった。

するとその視線に気付いたのか宇宙服はこう言った。

「心配するな、親御さんには了承済みだ。心底うれしそうだったよ。

ト

リユーへーは家族が喜んでる姿が安易に想像できた。

家族に未練はないが二次元の嫁達の事だけが心残りだった。

リユーへーは腕に抱えた嫁の首をより一層強く抱きしめた。

そんなことをしているうちにNASA宇宙ステーションに到着した。

いざ、NASAへ！！（後書き）

あれ？自室からでたからもつひきこもりじゃないんじゃない？

およみならリユールへー（前書き）

リユールへーを待ち受ける運命とは？

さよならリューヘー

リューヘーを待っていたのは人の良さそうな普通のおじさん然とした所長だった。

「NASAへようこそリューヘー君。じゃあさっそくだけど後3分で発射だから準備してね」

「はひ？」

「後3分で発射だから早くしてね」

「はひ？」

リューヘーが「はひ？」とか言ってるうちに宇宙服を着せられ、スペースシャトルに詰められ、飛ばされた。

こうしてリューヘーは宇宙へと旅立った。

元々犬を乗せるはずだったその宇宙船の操縦は全自動だったのでリューヘーは特にすることもなくずっと窓から見える景色を眺めていた。

地球が見えた。地球は青かった。

こうしてリューヘーは史上初、宇宙にひきこもった人間として一躍時の人として人々の記憶にその存在を焼き付けましたとき。

めでたしめでたし

さよならリユース（後書き）

作者がこれ以上は収集がつかないと判断したため無理やり完結させたことを心からお詫びします。

作者の次回作にご期待ください。

あと、ここまで見てくださった方、本当にありがとうございます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1825o/>

ひきこもリューハー ~めぐりあい宇宙~

2010年10月11日01時51分発行